

## 所外研修⑥ ユネスコ無形文化遺産「組踊」を鑑賞

6月13日(土)に国立劇場おきなわにて、「郷土の伝統芸能を鑑賞し、郷土文化についての理解を深め、教員としての資質向上を図る」ことをねらいとし、第6回所外研修として、「組踊」(国指定重要無形文化財、ユネスコ無形文化財)「執心鐘入」を鑑賞しました。

## 教育研究員の感想 (研修日誌から)

私は、高校時代と新採研修の時、今回と「執心鐘入」を鑑賞するのは、3回目になります。そのため話のあらすじは大筋知っていましたが、国立劇場で鑑賞するのは初めてで、事前の解説や説明、字幕があり劇に入り込みやすく親しみが持て、今までで一番楽しむことができました。座席も一番前で見る機会に恵まれ、衣装や仕掛けの細部を見ることができたり、床のきしむ音や役者の方々の息づかいまで感じられ、本物を生で感じる貴重な経験となりました。特に、宿の女が鬼になって現れたところは迫力があり、恐怖を感じ、役者さんの所作のすばらしさと音楽がもたらす効果にとっても感動しました。

沖縄の伝統文化に触れ、教師自身の感性を磨くことの大切さを感じると共に、後生へ残していくために、教師として何ができるのか考えていきたいと思えます。自分の子どもにもぜひ鑑賞させたいと思えました。(金城さくら)



写真1 国立劇場おきなわ前にて

鑑賞した組踊「執心鐘入」は玉城朝薫作で美男子中城若松に惚れた宿の娘のはかない恋の物語でした。私は、初めて組踊を鑑賞しました。教員として沖縄の文化を伝えることも重要だと感じています。今回、組踊を鑑賞し、テレビ等では味わえない迫力や臨場感を感じました。何事も直接見ることは何か感じるものが違うのだなと思いました。

現場にもどった時、今回の組踊「執心鐘入」について感じたことを、児童に話をして伝えて行きたいと思えます。その際、組踊が生まれた歴史的背景についてもふれることで琉球の歴史についても伝えることが大切だと感じています。組踊が国の無形文化財やユネスコ無形文化財として世界に認められたことの素晴らしさ、価値についてもっと知る必要性も感じました。また、玉城朝薫がなぜ組踊をつくり出す必要性を感じたのかも知りたいと感じました。(大城厚)

私にとって初の組踊でした。今まで敷居が高く、方言や見方を知らないと感じが難しいと思っていました。しかし、今回鑑賞する機会を頂き、組踊を身近に感じることができました。鑑賞前に歴史やじうてーの役割、作品の見方を分かりやすく解説して頂くことですんなり入り込むことができました。組踊「執心鐘入」で印象深かったのは、「じうてーの役割」と「一つ一つの所作」です。人物の心の声や場面や心の変化する場で、じうてーは重要で効果的な働きをしていました。所作の中には、動と静が非常に効果的に入っており、特に静の部分で、台詞や動きのほとんどない「間」に心の動きが読めるようになっていました。映画も大好きですが、生で見る組踊にも、心を奪われました。世界に認められている琉球伝統に触れることができ、貴重な体験となりました。(長門照乃)

第1部の「組踊の楽しみ方」では、組踊の歴史や音楽・地謡の紹介について分かりやすく紹介していました。また、観客の女性を舞台上上げて「即興組踊」をし、小道具の紹介や心情を音楽で表現することを実際の所作を通して説明しているのは、とても分かりやすく、飽きずに話を聞くことができました。また、組踊を鑑賞する視点を示してもらったので、第2部「執心鐘入」では、考えながらも楽しく鑑賞できました。

毎年、学校にも組踊鑑賞の募集パンフレットを目にします。しかし、忙しいとかバス代がかかる…などの理由で見に行けていない状態です。でも、今日改めて組踊を鑑賞して、沖縄の文化に直に触れることは、とても大切だなと思いました。だから、組踊を直に触れる機会を設定できるような方法がないのかを学校に戻ったときには探してみたいと思えます。(貝志堅智美)

国立劇場おきなわで組踊を観るのは初めてで、最前列で、踊りの細かい部分まで観ることができました。

印象に残ったのは、娘の化粧です。自分の思いが相手に通じず、女鬼に変わっていく場面で、舞台上で編み笠に隠れながら顔に赤い線を入れることでその変化を表現していました。

沖縄の伝統芸能である組踊を鑑賞することができ、沖縄の文化にふれることができました。300年も組踊りが継承され続けることは、それだけで沖縄に根付いているのだと実感しました。機会があれば、自分の子どもや学校の生徒にも本物を鑑賞させてあげたいと思えます。(古屋誠一)